

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00458

研究課題名（和文）海洋国家アメリカの文学的想像力：19世紀 minstrel の文学表象と海外輸出

研究課題名（英文）Literary Imagination of Maritime America : Literary Representations and Exports of Nineteenth-century Minstrel Show

研究代表者

中西 佳世子 (Nakanishi, Kayoko)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：10524514

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：建国間もない19世紀中葉のアメリカでは、デモクラシーにおける自由と平等を標榜する一方で、「秩序」と「制度」の固定化、支配構造を確立する必要性に迫られていた。minstrel ショーは国内では黒人と白人の差異を文化レベルで規定する役割を果たした。一方、米海軍はアジアや南太平洋、アフリカなどで minstrel ショーを行っており、minstrel が文化レベルでの差異化を図る装置として機能したと推察できる。本研究では、Nathaniel Hawthorne と Matthew C. Perry との関係、さらに Perry が日本人に見せた minstrel に注目し、minstrel ショーの海外輸出という観点から、19世紀中葉のアメリカの文化的特徴を明らかにすることを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀のアメリカ海軍がアフリカ、南洋、アジアで行った minstrel ショーに注目する研究はほとんど見られない。日本人が開国時に接触したのは、制度の確立を急ぐアメリカという国家を体現する「海軍」であり、その全権を委ねられた Perry はエンターテインメントを「文化的兵器」とし、艦上劇に人種差別的な minstrel ショーを選んだ。白人優位による「嘲笑」の共有は、支配・被支配関係に基づく「友好感情」を醸成する。本研究における学術的意義はこうした新たな観点から、海を渡った minstrel が果たした文化的差異化の機能を考察した点にあり、minstrel がその後の日米の文化交流に及ぼした影響を示唆した点にその社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：While advocating freedom and equality in democracy, the United States in the mid-19th century, shortly after its founding, was faced with the need to fix "order" and "institutions" and establish a structure of domination. Domestically, the minstrel show served to define the differences between blacks and whites at the cultural level. On the other hand, the U.S. Navy conducted minstrel shows in Asia, the South Pacific, and Africa, which can be inferred that they served as a device to differentiate at the cultural level. This study focuses on the relationship between Nathaniel Hawthorne and Matthew C. Perry, as well as the minstrel shows Perry performed for the Japanese, and attempts to clarify the cultural characteristics of mid-19th century America from the perspective of the overseas export of minstrel shows.

研究分野：19世紀アメリカ文学・文化

キーワード：minstrel Nathaniel Hawthorne アメリカ海軍艦隊 マシュー・C・ペリー 19世紀アメリカ  
リベリア植民地 日本開国 秩序と制度の固定化

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の発端はホーソン作品に多用されるプロヴィデンス(神の摂理)という宗教的概念の文化的・政治的言説に注目した筆者の博士論文にある。その研究の中で、ペリーが『日本遠征記』の編纂をホーソンに打診していたことを知り、ペリーと作家との関係に関心を抱いて調査を進め、両者が19世紀アメリカのプロヴィデンス言説を共有していることを見出した。2012年に「浦賀の「流星」とプロヴィデンス ペリーとホーソンと日本開国」を『アメリカ研究』(46号)で発表した。さらに科研費で採択されたテーマ「アメリカン・ルネサンスと日本開国を繋ぐ19世紀アメリカ言説の考察」(2014年-2017年)での研究を行い、続けて、海軍の発展とアメリカン・ルネサンスとの共時性に注目した「海洋国家アメリカの文学的想像力:アメリカン・ルネサンスと日米を結ぶ19世紀の言説」(2017年-2019年)というテーマで科研費による研究を実施し、2018年には『海洋国家アメリカの文学的想像力 海軍言説とアンテペラムの作家たち』(共編著)を刊行した。こうした研究の一環として、ホレーショ・ブリッジの航海記録をホーソンが編集したペリーのアフリカ艦隊記録『アフリカ巡航者の日記』の分析と翻訳を進める中、ペリーが日本開国時に行った minstrel show の問題が浮上し、本研究課題を進めることとなった。これまでの研究ではペリーが下田や函館で行った minstrel show について、アメリカ側ではペリーの伝記を書いた Morison, Samuel E. の “Commodore Perry's Japan Expedition Press and Shipboard Theater”、海外での異文化交流におけるペリーの演出について論じた Yellin, Victor Fell の “Mrs. Belmont, Matthew Perry, and the 'Japanese Minstrels'” などが触れている。Yellin はエンターテインメントとしての「文化的兵器」の役割について、Morison は海軍の規律と秩序と艦上劇との関係について述べているが、minstrel と切り離すことができない「人種差別的視点」や白人が規定する「野蛮」「未開」という視座は含まれていない。日本側では笠原潔『黒船と音楽』などでペリーの minstrel が詳細に説明されているが、こうした資料も概ね「友好関係」を結ぶものとして minstrel show をポジティブに捉える傾向にあり、1850年代のアメリカ本国における minstrel の政治性・文化性との関連を論じるものは見当たらないようだ。そうした経緯から、minstrel を通して築かれる「友好関係」に潜む、差別化、階級化、制度化の意図を批判的な視点を交えて考察する本研究に至ったものである。

## 2. 研究の目的

アメリカ文学が花開いたアメリカン・ルネサンスと称される19世紀中葉は、政治と文学が結びつき、アメリカが海洋国家としての歩みを踏み出した時期でもあった。同時代に海外進出に用いられた海軍の minstrel show が国内での流行と同じ文化思想を体現していても不思議ではない。日本人が開国時に接触したのはアメリカという国家を体現する「海軍」だが、ペリーが「文化的兵器」としてのエンターテインメントに minstrel show を選んだことの意味はもっと考察されてしかるべきである。minstrel show の人種差別的な「笑い」の共有によって構築される「友好関係」の構築と支配・被支配関係の意識化の類型は、アジア、南洋、アフリカに輸出された minstrel show にも見出しうるといえる。また、その思想の潮流は同時代のアメリカ文学における minstrel 的表象にもその類型が見出しうると思われる。歴史研究で行われてきたペリーの政治的戦略の研究とは異なり、本国内における文化思潮に視座を置き、海を渡った minstrel が持つ文化的差異化の役割を明らかにする必要がある。本研究の目的もそこにある。具体的にはアメリカの minstrel show 研究、日本における minstrel show の記録、アメリカ文学における minstrel 表象といった日本史、世界史、アメリカ文学史、音楽史などで限定的に扱われてきたテーマを、筆者のこれまでの研究実績をベースとして、学際的に考察し、その成果を発表してさらなる発展へとつなぐことが本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

### 1) 参考文献の読み込みと作品分析

minstrel show の起源と19世紀アメリカの minstrel show に関する文献(Erick Lott の *Love and Theft* や Robert C. Toll の *Blacking Up* など)を読み、本研究に関する理論についての知見を深めた。

アメリカ文学における minstrel 表象、とくにホーソン作品を中心に分析する。ここでは「minstrel show」という具体的なモチーフに限らず、ショー的な場面の中に組み込まれた「見る側」「嘲笑する側」の「優位性」やその揺らぎ、他者の規定によってもたらされる「差異化」「制度化」を描く minstrel 的笑いが果たす機能を分析した。

アメリカ海軍による minstrel について書かれている Brian Rouleau の *With Sails Whitening Every Sea*, John E. Erskin の *Journal of a Cruise among the Islands of the Western Pacific with Maps and Plates* などの海軍の minstrel show に言及する文献、海軍のアフリカ艦隊記録である Donald L. Canny の *Africa Squadron* を読み、Rouleau については学会誌に掲載の書評を執筆、Canny については後述の『アフリカ巡航者の日誌』に解説を掲載し

た。

2) 学会への参加、発表、講演による発表で本申請の研究内容に関する知見を得た。2021年には日本アメリカ文学学会全国大会で本研究の発表を行ったが、そこからいくつかの招待講演へとつながり、各学会で研究者との交流を深め、テーマを共有することで貴重な知見を得ることができた。

3) 翻訳研究会と出版

ホーソン編纂の『アフリカ巡航者の日誌』はペリー率いるアフリカ艦隊の記録であり、そこには艦隊のミンストレルショーの様子が描かれている。また本研究のテーマである「差別化」「制度化」という観点からすれば黒人への差別的ユーモアが遍在する本書自体が一種のミンストレルショーの形式を踏襲していると言える。本書の翻訳研究会を中央大学の高尾直知氏、東京海洋大学の野美砂氏とすすめ、2022年度に翻訳書を刊行した。

4) 国内調査と国外調査

横浜開港資料館、神奈川県立歴史博物館などでペリー来航に関する浮世絵、瓦版の資料を収集した。またフィジーの博物館、図書館、文化遺跡などで、19世紀アメリカ海軍遠征まつわる資料を収集した。

#### 4. 研究成果

2020年度

1) 『アフリカ巡航者の日誌』翻訳。高尾直知氏(中央大学)と野美砂氏(東京海洋大学)と研究会をオンラインで定期的開催し、翻訳に加えて注と解題に取り掛り、翻訳出版の準備を進めた。

2) ミンストレルに関する論文、研究書を収集し、読み込みを進めた。

3) 『テキストと戯れる』(松籟社2021年2月)収録論文「ホーソンの「幽霊」目撃体験と創作 - 「ハリス博士の幽霊」の執筆を行った。ここでは初期ホーソン作品における作家の創作手法の試みを考察した。実体験と想像を交錯させるその手法は『アフリカ巡航日誌』において、海軍士官の記録にフィクション性を加える編纂の手法にも見られるものである。

2021年度

1) 『アフリカ巡航日誌』の翻訳。昨年度に引き続き、高尾直知氏(中央大学)と野美砂氏(東京海洋大学)と研究会をオンラインで行い、令和4年10月の出版準備を進めた。解題の執筆に際し、Donald L. Canneyの*African Squadron: The U.S. Navy and the Slave Trade, 1842-1861*、その他、ミンストレルに関する文献の読み込みを行った。

2) 令和4年10月に開催される日本アメリカ文学学会全国大会で行う「HawthorneとPerryのミンストレル - *Journal of an African Cruiser*と日本遠征」の発表準備を進めた。

3) 令和3年12月開催の日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部研究会例会のシンポジウムで「揺らぐ家庭とホーソンの炉辺 『七破風の屋敷』を中心に」の発表を行った。本発表では『アフリカ巡航日誌』でも言及される奴隷労働の産物としてのコーヒーが、階級、人種、ジェンダーの問題を呈示するモチーフとなっていることを明らかにした。

2022年度

1) 19世紀アメリカ海軍のミンストレルショーに言及するBrian Rouleau, *With Sails Whitening Every Sea: Mariners and the Making of an American Maritime Empire*(2014)、19世紀作家における大衆文学の影響を論じるDavid S. Reynolds, *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*(1988)を読み込み、それぞれ『関西英文学研究』16号(関西英文学会誌)と『フォーラム』28号(日本ナサニエル・ホーソン協会誌)に書評論文として寄稿。

2) 10月の日本アメリカ文学学会全国大会(専修大学)にて「HawthorneとPerryのミンストレル *Journal of an African Cruiser*と日本遠征」の発表を行った。ナサニエル・ホーソン協会関西支部研究会12月例会読書会では上述*Beneath the American Renaissance*の司会・報告を行った。

3) ホーソン編纂『アフリカ巡航者の日誌』の翻訳を10月に刊行。令和5年5月刊行予定のホーソン協会40周年記念論集『ロマンスの倫理と語り いまホーソンを読む理由』に収録の「ドメスティック・イデオロギーを解体するホーソンの炉辺 七破風の屋敷」の暖炉とコーヒー」を執筆した。

4) 幕末史の研究を行っている笹部昌利氏(京都産業大学)の協力を得て、横浜開港資料館、神奈川県立歴史博物館で開国前後の日本における黒人受容に関する資料調査・収集を行った。

2023年度

1) Erskineの*Journal of a Cruise among the Islands of the Western Pacific: With Maps and Plates 1842-1861*を中心に資料の読み込みと分析を行った。

2) 京都産業大学「ことばの科学研究センター」2023年度研究会講演 立命館大学英米文学会年次大会講演 多民族研究学会全国大会講演でミンストレルに関する招待講演を行った。

甲南大学での日本英文学会関西支部でのシンポジウム「編集をめぐる攻防 検閲・炎上・誤

読」にて司会をつとめ、導入としてホーソンと編集に関する報告を行った。

3)『ロマンスの倫理と語り いまホーソンを読む理由』(開文社 2023年)に収録の「ドメスティック・イデオロギーを解体するホーソンの炉辺 『七破風の屋敷』の暖炉とコーヒー」を執筆した。

4) ナサニエル・ホーソン『おじいさんの椅子』の翻訳出版に向けて大野美砂氏(東京海洋大学)と高尾直知氏(中央大学)とオンラインによる研究会を進めた。

5) フィジー博物館、図書館、文化史跡で調査を実施。植民地時代の建造物を視察し、1838年から1840年に行われたウィルクスによるアメリカ合衆国遠征隊に関する資料を収集した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中西佳世子	4. 巻 16
2. 論文標題 書評論文「私の一冊」 「19世紀アメリカの海洋フロンティアと船乗りたち Brian Rouleau, With Sails Whitening Every Sea: Mariners and the Making of an American Maritime Empire, 2014. xii+268 pp.」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『関西英文学研究』	6. 最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西佳世子	4. 巻 28
2. 論文標題 書評エッセイ「古典再読」 「David S. Reynolds Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville, Oxford UP, 2011.(1988) xii+625 pp.」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『フォーラム』	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中西佳世子
2. 発表標題 批評読書会司会・報告「アメリカン・ルネサンス再考」 Reynolds, David S. Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville. Oxford UP, 2011.(1988初版)
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソーン協会関西支部研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中西佳世子
2. 発表標題 「Hawthorne と Perry のミンストレル Journal of an African Cruiser と日本遠征」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第61回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中西佳世子
2. 発表標題 「揺らぐ家庭とホーソーンの炉辺－『七破風の屋敷』を中心に」（シンポジウム「アンテペラム期の作家と住まい」）
3. 学会等名 日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中西佳世子
2. 発表標題 「Hawthorne と Perry のミンストレル Journal of an African Cruiser と日本遠征」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第61回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中西佳世子
2. 発表標題 ミンストレルショーと黒船：『アフリカ巡航者の日誌』と『日本遠征記』を中心に
3. 学会等名 京都産業大学「ことばの科学研究センター」2023年度第二回研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中西佳世子
2. 発表標題 黒船のミンストレルショー：『アフリカ巡航者の日誌』と『日本遠征記』を中心に
3. 学会等名 立命館大学英米文学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中西佳世子
2. 発表標題 黒船のミンストレル・ショー：『アフリカ巡航者の日誌』と『日本遠征記』を中心に
3. 学会等名 多民族文化研究会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中西佳世子（司会）
2. 発表標題 ホーソン・アフタヌーン「編集をめぐる攻防 検閲・炎上・誤読」
3. 学会等名 日本英文学会関西支部ミニシンポジウム
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 西谷拓哉、高尾直知、城戸光代編（中西佳世子論文収録）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開文社出版	5. 総ページ数 461
3. 書名 ロマンスの倫理と語り いまホーソンを読む理	

1. 著者名 ホレーショ・ブリッジ作、ナサニエル・ホーソン編、大野 美砂、高尾 直知、中西 佳世子訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 341
3. 書名 『アフリカ巡航者の日誌 ペリー艦隊・奴隷貿易・リベリア』	

1. 著者名 高野 泰志、竹井 智子、中西 佳世子、柳楽 有里、森本 光、玉井潤野、吉田 恭子、島貫 香代子、杉森 雅美、水野 尚之、四方 朱子、山内 玲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 344
3. 書名 テキストと戯れるーアメリカ文学をどう読むか	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------